

沖縄のページ

梅澤元少佐死去から2カ月

沖縄戦で慶良間諸島座間味島の守備隊長を務めた元陸軍少佐の梅澤裕氏が8月6日に97歳で死去して2カ月が過ぎた。戦後、地元メディアは梅澤氏について「集団自決の軍命を下した張本人」として非難したが、最近の二つの裁判の判決を通じて軍命の証拠がないことが明らかになり、「軍命」説の誤報が問題化している。沖縄戦ドキュメンタリー作家の上原正稔氏は、地元紙に誤報の謝罪を求めるとともに、梅澤氏が残した功績を正しく知ってほしいと訴える。

(那覇支局 竹林春夫、豊田剛)

「従軍慰安婦問題で朝日新聞の誤報が問題になっているが、沖縄戦での集団自決の『軍命』説も大誤報で、大問題だ」

梅澤氏と文通で交流を深めていた上原氏にとって、梅澤氏の死去後2カ月が過ぎて、地元マスコミの約60年間にわたる「軍命」説の誤報に怒りを禁じ得ない。

上原氏は梅澤氏の訃報を聞いた翌日、美菜子夫人に電話した。「もう年ですから」という夫人の言葉に対し、上原氏は「梅澤さんを支えたのは美菜子さん、あなたです」と立派な夫婦

愛をたたえた。

梅澤氏は戦後、「集団自決命令を下した張本人」として地元

「軍命」説の誤報取り消さず

否定した。

上原氏は、沖縄戦当時の集団自決の真相を説明すべく、2007年5月から琉球新報夕刊に「バンドラの箱を開く時」と題した掲載を始めたが、慶良間諸島の集団自決の真相に関する原

メディアなどによって「極悪人」に仕立てられた。しかし、最近になって、戦後の琉球政府

で軍人・軍属の遺族支援業務に携わった照屋昇雄氏が、「遺族に援護法を適用するため、軍による命令ということにし、自分

地元紙に謝罪求める

ドキュメンタリー作家の上原氏

「汚名そそぎ功績たたえたい」



梅澤裕氏の棺に献花する美菜子夫人（中央）と遺族＝8月10日、ユアホール甲子園（西宮市）

たちで書類を作った」とつくられた軍命」について勇氣ある証言をしたほか、2005年8月から11年4月まで行われた「沖縄集団自決冤罪訴訟（大江・岩波裁判）」の判決は、軍命について「真実性の証明があるとはいえない」と明確に

稿を琉球新報社が一方的に中断したことに対し、「契約違反であり、言論の自由を踏み越えた」として11年1月に琉球新報

報告会を終え手を取り合う梅澤裕氏（右）と上原正稔氏（左）
2013年11月24日、大阪市北区



「伝えたい」と上原氏は8月12日、県庁で記者会見を開いた。「耐え難きを耐え、忍び難きを忍んだ素晴らしい人だった」冒頭、こう述べた上原氏は、「このたびは勝訴おめでとうございます。私もびっくりするほどの驚きで家内、息子とも大喜びしております。さっそく軍関係、同期生会、大阪の元軍人会に知らせ関係者はみな大喜びしています。（中略）これから徐々に沖縄の空気も変わってくるでしょう」

上原氏は、梅澤氏について地元紙が「軍命」説をした張本人として断罪しただけでなく、訃報でも大江・岩波裁判での原告敗訴という結果だけを掲載し、

「このたびは勝訴おめでとうございます。私もびっくりするほどの驚きで家内、息子とも大喜びしております。さっそく軍関係、同期生会、大阪の元軍人会に知らせ関係者はみな大喜びしています。（中略）これから徐々に沖縄の空気も変わってくるでしょう」

人物像が完全にゆがめられた梅澤氏のために何かしなければならぬという思いに駆られて上原氏は、「慰安婦問題で謝罪した朝日新聞の誤報問題は、琉球新報、沖縄タイムスにも通じること。2紙の罪は深い」と「軍命説」の誤報を取り下げていない地元マスコミの責任の重大性を強調した。

社を提訴（バンドラの箱訴訟）。13年7月29日に福岡高裁那覇支部で上原氏の主張を認め、勝訴が確定した。

梅澤氏の死後、同氏の「汚名をそそぐ」とともに、感謝の意を

お棺の中に「ハンチング帽」

弁護士 徳永信一

8月6日に逝去された梅澤裕さんの告別式が挙行されたのは激しい雨の日だった。棺の中に横たわる梅澤さんに近づき最後のお別れを告げようとしたとき、瞑目するご尊顏の傍らに収まったハンチング帽に目を奪われ、しばし、釘付けとなった。

そのハンチング帽は、昨年



11月、沖縄のドキュメンタリー作家、上原正稔さん

が梅澤さんを訪れるために大阪にきたとき、那覇で戦

ならぬと結ばれていた。原稿での訴えとおり、上原さんは、沖縄人を代表して梅澤さんに直接会って謝罪するためにやって来たのだった。お棺に収められたハンチング帽には、「おめでとう。ありがとうございます。僕らのヒーロー梅澤裕様の文字があった。釘付けになった目から涙がこぼれた。無責任な言論によるいわれなき誹謗に翻弄された梅澤さんとそのご遺族が、沖縄人を代表して行った上原さんの感謝と謝罪を受け入れてくれたように思えたからだ。最後の別れを終え、僕は、会館の外に出た。また降り続く激しい雨が嬉しかった。